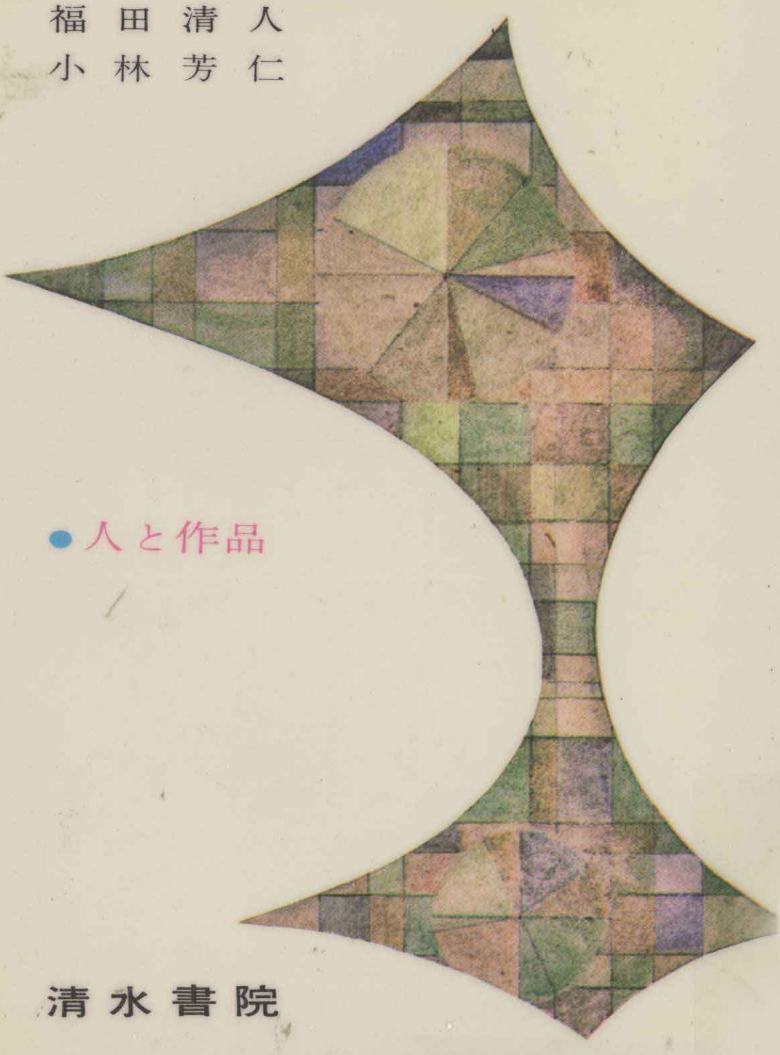
CenturyBooks

坪内逍遙

福田清人
小林芳仁



●人と作品

清水書院

坪内逍遥 ■ 人と作品 37　定価はカバーに表示

昭和44年6月20日　第1刷発行　©
昭和53年7月31日　第3刷発行

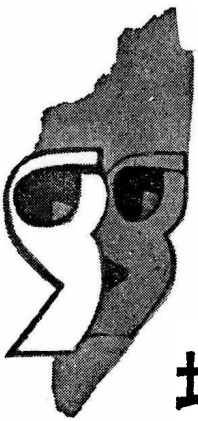
・編著者……福田清人（ふくだきよと）／小林芳仁（こばやしよしひと）
・発行者……野村久也
・印刷所……児山印刷

検印省略
落丁本・乱丁本は
おとりかえします

・発行所／清水書院／東京都新宿区東五軒町5
Tel・東京（260）5261〜6／振替・東京 3-5283
郵便番号　162

CenturyBooks　清水書院

1395-402370-3028



坪内逍遙

●人と作品●

37

福田清人
小林芳仁

CenturyBooks　清水書院

原文引用の際、漢字については、
できるだけ当用漢字を使用した。

序

青春の日、すぐれた文学書や、歴史上に大きな足跡を刻んだ人物の伝記をひもとくことは、精神の豊かな形成に大いに役だつことである。

ことにさまざまな苦難を克服して、美や真実を求め、生き抜いた文学者の伝記は、この双方にまたがっていて、強い感動をよび、またその作者の作品理解のため、大きな鍵の役割もつとめてくれるものである。

すでにもう五年ほど前のこと、私は清水書院より、近代作家の伝記とその作品を平明に叙述する「人と作品」叢書の企画についての相談をうけた。書院がわの要望は既成の研究者よりむしろ新人に期待するということであったので、私の出講していた立教大学の大学院で、近代文学を専攻している諸君を中心に推薦した。また、それらには私も名を連ねることになったので、原稿には眼を通した。

そして、書き手が立教にいない場合は、その方面の研究者を推薦した。

こうして一九六六年に第一期五冊位から出発したこの叢書も、四年目に当たる六九年、予定の三十八冊を完成する運びとなった。若い層を読者に想定したのであったが、作家によっては、幅広い読者があり、幸い好評なのは喜ばしい。

この「坪内逍遙」の筆者小林芳仁君は、徳島大学から、大正大学大学院（修士課程）に学び、後に立教大

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

学の博士課程に進んだ篤学の士であり、現在都内のある女子大学附属高校に勤務している。

「小説神髄」によって近代小説の水先案内をつとめた逍遙は、翻訳に演劇に、創作にまた後進の育成に、大きな存在であった。小林君は、この一巻にあふるるほど、その先駆者の俤(おもかげ)をみたしてくれている。

福田清人

目次

第一編　坪内逍遙の生涯

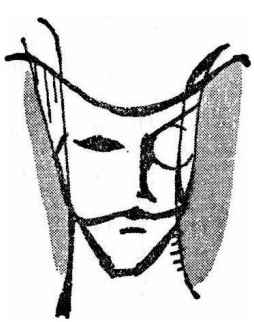
故郷とその幼年時代……一一
少年時代……二〇
青年時代……二八
小説の革新……三四
「早稲田文学」のころ……四四
教育の革新……五六
演劇の革新……六三
「文芸協会」前後……七〇
著述翻訳のころ……八八
晩年……一〇一

第二編　作品と解説

当世書生気質……一一六
細　君……一二九
桐一葉……一三五
新曲浦島……一四七
役の行者……一五八
小説神髄……一七〇
（逍遙における）
シェイクスピア翻訳の実例……一七九

年　譜……一九三
参考文献……二〇〇
さくいん……二〇一

第一編　坪内逍遙の生涯



願わくば朧月夜の落椿　　逍遙

ロマンチックな春のおぼろ夜に、満々と開いたまま、まったく何の未練もなくポトリと散る椿の花。

たった一度の短い人間の一生であってみれば、その成功不成功は別としても、かぎられた生命を精いっぱい生き、自らの力のかぎりするだけのことをして、まだ惜しまれているうちに死んでゆきたい、どうせかならず散る花なら、美しいうちに美しいまま、と願うのは、ひとり逍遙のみではないであろう。

「わたしは死ということを恐れはしない。ただ病気になって、仕事が何もできなくて生きているのは耐えがたい苦痛だ。」

とは、平生彼がよく口にしていたことばであった。

春の舎おぼろ—これは逍遙坪内雄蔵の初期の雅号である。「や」は「夜」も意味しており、春のおぼろ夜の、あの甘い懐かしい、夢見るような美しさをさしている。それは舞台の背景のようでもある。そして逍遙自身、人の生涯はどうせ一幕のトラマでしかないならば、せめてその美しい背景の舞台を、逍遙するような人生を送りえたら、と思ったのである。

おもしろの春の小雨や
裏むけに羽織かぶりて
笻かつぎ石いくつとび
童さび声うちあげて
翁こそ帰り来ましぬ
柿がもと白梅がもと
からからと帰り来ましぬ
先生らしも　（白秋）

双柿舎に逍遙を訪ねたときの白秋の感懐である。春の夜のおぼろといい、逍遙といい、いかにもロマンチックで、夢幻的で、ボヘミアン的で、しかも白秋のうたったように、子供のように純情で、ひょうきんで、―これが本来の逍遙らしい姿であった。だが、彼の織りなす人生ドラマははたしてそうであったろうか。この答えは容易ではない。「諾！」ともとれる。「否！」ともとれる。だがこれだけはいえる。彼は「逍遙」の名の象徴するように、自由な芸術家魂と芸術的自我によって道をきり開き、その生涯と情熱を、ひたすら文学革新のために、あるいは新しい演劇促進のために、常に啓蒙家として、たとえ世の反逆に遭遇しても、その生き方はたえず純粋でかつ美しくありたいと願っていた。そしてそのなによりの証拠はセン夫人への愛

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

が証明している、と。

世は封建の徳川時代から明治と改まり、チョンマゲはザンギリの断髪に変わっても、文学はなお依然として、勧善懲悪主義の戯作もの、つまり戯れの文学であり、新しいものといえば、せいぜい政治的なものか科学ものの、西洋文学の翻訳しかなかった時代に、これからの小説はあくまで世態人情をありのままに写すべきもの（写実主義）、しかも人情を第一とし、それも心理的に分析したものでなくてはならない、と主張して、いわゆる人間主義を復活させたのも彼であった。二葉亭四迷も尾崎紅葉も幸田露伴も、逍遙に啓発されて新文学の発展に寄与するようになったのであり、いわば逍遙は、近代文学の方向を指示し、その確立の生みの親でもあったのだ。

加えるに、若いときからイギリスの文豪シェイクスピアについて、その第一人者ともいわれるほど造詣が深く、ついには個人でその全戯曲を翻訳するという、世界にも例をみない大事業をなして、シェイクスピアを日本に紹介したり、さらには歌舞伎改良に精力を傾け新史劇を生み、ついには自らの家財を投入して、劇の革新的実際運動に、新しい型の俳優養成に、努力を傾け、幾多の名優・新劇団誕生の母胎となり、今日の新派・新劇・児童劇、そして歌舞伎の隆盛をみるに至ったのである。

その他逍遙の業績は、文学・美術・劇・思想・教育と、あらゆる文化の広きにわたり、しかも明治・大正・昭和の三代を通じて、常に時代をリードし啓蒙していったことである。

かつて『逍遙選集』出版のみぎり、その友人や弟子たちが相集まり、出版趣意書にこう書いた。

「『一人にして数世紀なり。』逍遙が他の名匠にあたえたこの賛辞は、あるいは彼自身においてこそふさわしい。」と。

まことにそのとおりだと思う。

いつの世にも、時代をリードし啓蒙してゆくことは、多くの苦難が伴うものである。明治が遙かなる忘却のかなたへ、あるいは去りつつあるかに思われる現在、われわれは百花繚乱として咲き乱れる現代文学の礎となった、先達坪内逍遙の、その人間味あふれる生涯と、偉大な業績に接することによって、新たな感慨と、そして改めて現代を生きる意義とを考えさせてくれる。

逍遙は、確かにもっと見直されるべき人なのである。

故郷とその幼年時代

山紫水明の地　木曽の桟、太田の渡し…近年歌にまでうたわれた中仙道太田の宿駅は、美濃と尾張の国境

故郷太田　にあって岐阜・名古屋・飛騨・信濃路への分岐点となり、いわばその街道の要であった。現在では、中部山岳地帯を横断する高山線が通過するほか、鵜飼で有名な長良川をさかのぼる北美濃への越美南線、あるいは太多線の発着駅ともなっていて、気候温暖・湿度・雨量ともに適度な理想郷、正しくは美濃国加茂郡太田村（現在の岐阜県美濃加茂市）こそ、坪内勇蔵（のち雄蔵）の生誕の地であった。

この太田に尾張藩（徳川家）の代官所があった。代官所および代官所役人の住宅は、悠々たる木曽の流れをのぞむ岸辺の一角にあって、御陣屋または陣屋と呼ばれ、逍遙も父が代官所役人であったところから、この役宅で産ぶ声をあげたのである。時に安政六（一八五九）年五月二十二日、かの黒船到来にひきつづき、世に安政の大獄として知られる、攘夷、開港論のはなばなしい、幕末騒然、世相険悪の年であって、吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎ら多数の志士が刑死し、水戸斉昭が禁固処分を受け、そして横浜の港が開かれた。しかもその翌年には、開港論者であった大老井伊直弼が、桜田門外で水戸藩士のために非業の最後を遂げている。

逍遙の父は尾張藩代官所付の手代、坪内平右衛門信之、当時四十七歳、母はミチ女、三十九歳、逍遙はそ

の第十番目の末子で、兄弟は、男女おのおの五人であったが、兄二人姉二人は若死、そのために事実上は三男として育てられた。幼名を勇蔵、名のりは信賢と名づけたのも、武士の子らしく強く勇ましく育つことを願ったからであったが、実は全くの母親っ子であったらしい。ともあれ、のちにみずから勇蔵を雄蔵と用い、ついに戸籍面までも改めてしまったのは、勇の字が自己の性格とほど遠いことを知り、しかも前途に夢多き青年であってみれば、「雄」の字こそ適当であると判断したからにちがいない。

また、彼がその幼年時代を過ごしたという代官所役宅の玄関の前には、大きな桜の樹や椋の樹があって、村々から総代が陳情にやってきたり、時には父に叱られていた光景もみられ、すこし離れたお白洲からは、桜越しに拷問の声も聞こえたとか。しかしこの役宅も明治維新後にはとりこわされてしまったので、今はなんらその痕跡をとどめないが、ただ大きな椋の木だけが残っており、その家も現在の太田小学校西隣り辺であったろうと推定されるばかりである。

勤勉実直で風趣な家系　坪内家の家系は、逍遙の父に至るまで、五代約百五十年間にわたって尾張徳川家に仕えている。五代のうち、は

逍遙生家跡付近より見た木曽の流れ

じめの二代は中島伊助を名乗り、尾張徳川家の御庭組足軽を勤めていたが、三代目中島伊助は農家出身の養子であって、どういうわけかいつごろからか坪内姓を名乗り、名も平右衛門と改めた。つまり初代坪内平右衛門である。彼はなかなかの人物で、先代からの足軽を受けついだものの、とんとん出世して代官所手代となり、勤続すること五十年、その間、民治の功績で賞を賜わること数度、きわめて実直な人柄であった。ついで、二代目坪内平右衛門（養子、逍遙の祖父）、三代目坪内平右衛門（逍遙の父）と、太田代官所手代を継いでゆくが、いずれも堅実で、勤続年数の長い模範的役人であった。特に父平右衛門は、「年来存入厚く相勤め、農民取廻し方等行届き候に付き、」とおほめにあずかり、家の格も御徒士格に上げられて、禄も二度加増された。やがて明治元年、今までの代官所が総官所となり、平右衛門も手代から属吏と変わって、名も平之進と改め、ひき続き調べ役を担当したが、翌年辞職して、名古屋へ移住、明治十五年、七十一歳で没している。

また母ミチは尾張国春日郡大曽根（現在の名古屋市東区大曽根町）、酒造業松屋藤兵衛の娘であった。元来松屋は弥兵衛といい、初代は阿波国徳島城下佐古町の紺屋職松屋の出身で、いつのごろか名古屋城下竹屋町に移り住み、紺屋職と金貸業を営んで、一時ずいぶん繁盛したが、不良貸付のための回収難が原因で、二代にしてついに破産同様におちぶれた。それを三代目藤兵衛が、心機一転、大曽根村で酒造を始め、再興したのである。藤兵衛はまた「五道」と称するこの地方の著名な俳人であったが、不幸にも二度まで妻に死に別れ、三度目にめとった妻がリオだった。リオは早くから織田家の奥向に仕え、文学や歌道のたしなみが深く、五道との間に一男一女をもうけたが、五道死後その一女をつれて二代目坪内平右衛門の後妻となった。その一

女こそ逍遙の母ミチだったのである。しかも当時平右衛門には、先妻との息子与三郎（後の三代目平右衛門つまり逍遙の父）があり、この与三郎にミチをめあわせた。これが逍遙の両親である。

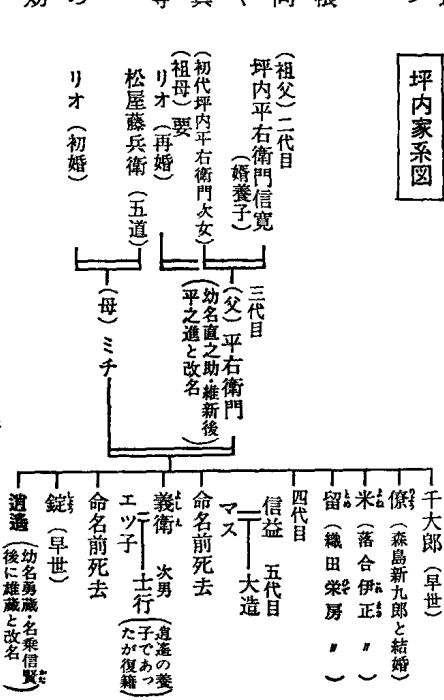
以上の家系から考えられることは、おおむね父方は勤勉、潔癖、着実という面で、母方は風流のたしなみ、文芸趣味という面で、それぞれのちの坪内逍遙に影響しているのである。晩年逍遙は、父についてつぎのように回想している。

「肉体的にも精神的にもごく潔癖家で、几帳面な気むづかし屋であった。口数少なく、同輩へは勿論上役へ向かっても、決して追従や世辞をいったことのない、ごく無愛想な、真面目くさった顔の男であった。…」（「私の寺子屋時代」）

こうした不言実行型の誠実な人柄は、代官の信任、同僚の人望、そして民治の上にもよき効果をもたらした。

また、母については、

坪内家系図



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong